

〔論文〕

神島二郎の論点—社会学理論としての解読

早川 洋行

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

本論文は、政治学者神島二郎の業績を社会学理論の観点から再評価するものである。1では、問題の所在を明らかにし、2ではこれまでの研究と評価を紹介して、その不十分さを指摘する。3では、神島の業績の中から7つの概念群を抽出して解説する。4では、それら7つの概念群を使って、神島の近代化論を再構成した後に、そこから読み取れる神島の視点の特徴を論じる。そして、これら7つの概念群が現代社会の理解にも有効なものであると主張する。

キーワード：神島二郎，近代化，社会学理論

The Point of Jiro KAMISHIMA—Decode as Sociological Theory

Hiroyuki HAYAKAWA

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

目 次

1. 問題の所在
2. これまでの研究と評価
3. 7つの概念群
4. 基本視軸と現代的意義

発行日 2016年3月31日

1. 問題の所在

2014年7月に世界社会学会議横浜大会が開催された。これはまさしく、日本の社会学の世界にグローバル化の波が押し寄せていることを象徴する出来事であった。近年、国内の学会大会において、外国人研究者が報告することは珍しくなくなってきたし、若手研究者が国内の学会に先んじて海外の学会大会で「学会デビュー」する例も見受けられるようになった。

こうした傾向に並行して、わが国においてこれまで蓄積されてきた社会学の業績への注目が集まっている。ここ数年、日本社会学会では、吉田民人、栗原彬、見田宗介、佐藤慶幸の業績を検討するセッションが設けられ、日本社会学史学会では、鶴見俊輔、丸山眞男がシンポジウムで取り上げられている。これらグローバル化と国内業績に対する再評価の動きは無関係ではない。学問研究の国際的交流が活発化すればするほど、あらためて世界に発信できる、日本人の、国内で生まれた業績は何かという問いが浮かび上がってくるのは当然の成り行きだろう。

本稿は、そうした流れのひとつと言えようが、その中であっても、いささか独自の視角をもっている。日本社会学会において国内の社会学者の業績が論じられるときには、社会学者として通用している人物が取り上げられるのが常である。一方、日本社会学史学会は、この点では比較的寛容で、鶴見や丸山のような、哲学者や政治学者の業績も議論の俎上にのせるが、ただし、それらは社会学ではなく、独自のひとつの体系性をもつ「思想」として論じるきらいがある。言い換えれば、知識社会学の対象として論じるのである。

本稿は、神島二郎（1918-1998）の業績を取り扱う。彼は、よく知られているように日本政治学会の理事長をも務めた政治学者である。しかし、ここで私は彼の業績を（政治）社会学の理論として評価する。つまり、一般に政治学者としてみなされている人物の業績を、思想としてではなく、社会学理論として読み解いてみたい。

今日、学問は専門分化している。だから、こうした越境はたしかに異例のことだろう。丸山眞男の『政治の世界 他10篇』（岩波文庫）を編集した松本礼二は、それに付した「解説 丸山眞男と戦後政治学」において、丸山がゲーテの言葉をひき医学は人間の総体を扱うものであると言い、J.S. ミル（もしくはT.H. ハクスリー）をひいて、あらゆる楽器の奏法を知る指揮者を例に出して、政治学者は医者にして指揮者であれ、と言ったことに対して、「今日の学問状況を前提にすれば、率直に言って、これは過大な要求であり、本解説の執筆者自身を含めて大方の政治学者にとって、いささか迷惑である」と言い切った（松本2014；485-486）。

私は、こうした立場をとらない。専門分化の時代にあって、広い視野をもつことはたしかに困難になってきている。しかし、全体性を志向することが、百科事典的である必要はないし、おそらく丸山もそうした意味で言ったのではないと思う。その業績を残した人物がどの学問分野に属していたとしても、そして本人がどのように考えていたとしても、同じ「社会」を考察した業績である以上、社会学の視点からみて優れているのなら、それはそれとして、積極的に社会学の財産にすべきである。本稿では、その視角から神島の業績を再考する。

2. これまでの研究と評価

神島の人物像については、追悼論文集『回想 神島二郎』に詳しい¹⁾。しかし、彼の業績に対する研究の多くは、個別の作品（その多くが、彼の代表作『近代日本の精神構造』）に対する論評に限られている。多少視野を広げたものとしては、最近、戸邊秀明が民衆観という新しい視点から神島を考察しているが、これも『近代日本の精神構造』を送り出すまでの彼の思想史研究の模索を検討したものである（戸邊2014；219）。

管見した限りではあるが、彼の業績全体を見渡したうえで論じたものとしては、大森美紀彦「神島二郎研究ノート」と、ひとつの節を割いて論じている田口富久治『戦後日本政治学史』があるぐらいと言ってよいだろう。しかし、それらの論考にしても、前者は「主に『近代日本の精神構造』以降の研究で神島が何を企図し何を達成したかを整理することを目的」とした、文字通りの「研究ノート」であったし、後者は、神島の丸山真男解釈に絞って論じられていて、神島自身の理論については、「紹介」に重点をおいて「評価」を慎重に避ける叙述がなされている。

では、これまで社会学者は、神島をどう扱ってきたのか。もちろん、彼の研究をまったく無視してきたというわけではない。とくに代表作である『近代日本の精神構造』にはそれなりの注目を払ってきた。神島は、自ら『社会学文献辞典』（弘文堂、1998年）にこの書の解説を書いているが、それ以外に、筒井清忠編『日本の歴史社会学』（岩波書店、1999年）における永谷健の論考と井上俊・伊藤公雄編『日本の社会と文化（社会学ベーシックス第10巻）』（世界思想社、2010年）における北野雄士の論考が存在する。ただし、このうち後者の論考は、本書の要約紹介に終始し、「さまざまな分野の研究者に大きな刺激を与えた」と述べるにとどまり、神島の学説内容に対する意見は皆無である。前者の論考では、「神島は歴史研究の対象を庶民意識の深みまで広げた」と評価する一方で、次のようにも批判している。「本書の視座は、柳田民俗学への傾斜を深めるなかで、しばしば論旨の矛盾を生み出すことにもなった。一方では、伝統的な民族的世界を理想化することをつうじて、そうした世界と比べていかに近代庶民意識が荒廃しているかを語ろうとする病理的近代観や病理的都市観が強く打ち出された。しかし他方では、アニミズムや神人合一教の伝統が「主体性」の育成を阻害し、西欧との差異を生んだとする単純な還元主義や宿命論が展開されたのである」（永谷1999；170）。こうした永谷の批判は、わからぬでもないが、「日本的な近代」を解明しようとした神島にとって、伝統的なものに注目するのは当然であり、近代を捉えようとするときに、そうした伝統的なものをアンビバレントな態度で論じるのは、それもまた当然だろう。それを「論旨の矛盾」と言ってしまっているのか。私にははなはだ疑問である。

このように神島は、彼の本来の専門分野である政治学の領域に限らず、これまで十分評価検討されてきたとは言い難い。それは何ゆえであろうか。おそらくそれは、家永三郎をして「行文があまりにも難解であって、正直なところ部分的にも全体的にも完全に理解したと断言する自信がない」と言わしめたように、彼の使う言葉が独特であることと、そしてまた彼の論理展開が晦渋で、実証性を重んじる一般的な歴史学や政治学からはわかりにくかったからではないだろうか（家永1961；94）。しかし、この手の文章は社会学理論の分野では馴染みのものであり、彼の論述を社会学的分析として読み

解くならば、有意義な知見が得られるのではないだろうか。

3. 7つの概念群

社会学理論からの接近は、彼の思考過程だとか、他の思想との相互関係を明らかにするというよりも、現代社会の解明にとって有効性をもちうる視点や方法論、そして概念を抽出するものである。

この章では、その観点から神島思想の中から7つの概念群を抽出して解説しよう。ここで取り上げる言葉は、その多くが日本社会の近代化を説明する際に、神島が措定したもののだが、それに限らず、他の諸事象にも十分応用可能性をもっている。それは結果的に彼の思想を総体的に理解することにもなるが、むしろそれよりも、社会学用語としての、彼が作った概念の価値を明らかにしてみたい。

①単身者主義

この言葉は、『近代日本の精神構造』でも使われてはいるが、むしろ『日本人の結婚観』でよく使われた言葉で、そのときは「独身者主義」と言った。彼はこの変更について次のように述べている。

ふるい社会が近代社会になるということは、ふるい社会が解体され再編されてくる過程ですけれども、その解体・再編をどういう筋立てで捉えてみたらいいか。ふるい社会を解体しながら新しい都会社会ができてくるその出来方は、日本の場合、ふるい社会の中の、家族の中の、単身者が都会に引き出される、あるいは自分から都会に出てくる、そういうことによって新しい社会ができてきた。その点、かつてはそれを独身者、ひとり者と呼んだ家付属の人たちがおったわけですが、それが出てきたわけです。それを、はじめ私は「独身者主義」と読んでいたんですが、これは「独身主義」と取り違えられるものですから、それを「単身者主義」と呼び変えてみたわけです（神島1981；30）。

このように「単身者主義(独身者主義)」は、日本の近代化＝都市化を説明する概念として生まれた。ただしこれだけを読めば、日本の近代化の過程で、田舎から都会へ結婚前の若い層が移動したことを意味するようと思われるかもしれない。しかし、これはまったく皮相的な理解である。この概念は、そのことにとどまらず、きわめて豊かな意味をもっている。

その第一は、旧来の家族秩序が崩壊したことで、個人が析出され、それが別の集団によって包摂されたという流れの中で、把握されていることである。

神島は「かつて独身者の面倒をみたものが大家族であったように、大家族的パターンリズムを官庁、会社、団体がうけつぐことによって独身者本位の体制がつくりだされました」（神島1977(1961)；85）と述べて、この過程で生まれた「個人」についてとても興味深い見解を披瀝している。

彼は「孤独としての個人主義」と「雙個あい合しての個人主義」とを区別する(神島1961;224)。そして、孤独としての個人主義が単身者主義(独身者主義)だと言う。前者は、略奪的投機的であるのに対して、後者は蓄積的再生産的である。こうした単身者主義は、欲望自然主義を生み出した。欲望自然主義に

は、「功名本位のものから性欲本位のものまでである」が、忠臣蔵の義士たちに典型的にみられるように、恣意的で献身的な欲望がそれ自体として目的化したものである。

第二に、これは都市構造の問題としても論じられていることである。彼によれば、単身者が生活しやすい条件は、食と性とがいつでもどこでもみたされることである。彼はこれに続けて次のように述べている。

具体的にいえば、食堂と売春宿がピンからキリまで用意されていることであろう。これらは単身者の生活と見合ったもので、単身者がたくさん集まってくらしているところにはかならずこれらの施設ができないではないし、これらの施設が魅力ある形で用意されれば当然単身者が、すくなくとも人びとが単身で、集まってくるという関係にあるわけである。わが国近代以降の都会の発達はむしろ後者の形、すなわち都会に単身者本位の施設を用意することが先導していたのではないか、というのが私の考えである（神島1982a；65）。

都市への人口移動を都市からのプル（pull）で考えるか農村からのプッシュ（push）で考えるかは、いずれもが正当性をもつ。おそらく現実には、二つの力が同時に働いたに違いないが、プルする力として、都市がもっている単身者に対する魅力に注目するところが神島のオリジナリティであると言ってよいだろう。

第三に、彼は、これをいわゆる日本的経営の根拠としているように思われる。彼は単身者主義が低賃金を可能にしたのだと言う。日本の近代の産業は出稼ぎ労働によって作られた。イギリスの場合、農村に囲い込み運動が起こって、単婚小家族が都会に流れ込んだのだが、そういう労働者の賃金は、家族で食べていかれる程度がベースになる。これに対して、単身出郷者を雇う場合には、一人の人間が生活できる賃金だけでよい。当初それは経営側にとってとても都合だったわけである。もっとも、そうした単身者もやがて世帯をもつようになる。そうすると低賃金ではやってゆけない。そこで年功賃金制度や家族手当が作られ、会社がレクリエーション施設をもつようになる。つまり、会社を単位とした家族主義が生まれていくのである。

神島は、田舎から都会に出てきた独身男性が担ったものこそ単身者主義であり、それは、近代日本の思想や都市や経営に見て取れると主張した。では、そもそも、その単身者主義とは、どのように定義すべきものであろうか。この点について、神島は次のように言う。

考えてみると、一方では、前近代的な家族が崩壊し、他方、近代的な家族も形成されなかったからこそ、家族主義イデオロギーが国家社会に通用し普及したのではないだろうか。（中略）すなわち、イエに責任をもたないですむ身一つの生活形態が都会生活を中心に拡がりつつあったということだ。そしてこの風が家族の責任者にまで浸透していったということだ。そうした生活形態を私は、「単身者本位」、または「単身者主義」と呼ぶことにしている。ただし、これは「主義」といってもイデオロギーとしてではなく認識上の道具として使うということをとくに注意しておきたいと思う（神島1982a；63-64）。

「イエに責任をもたないですむ身一つの生活形態」,これが単身者主義の内包的意味である。神島はこの単身者主義を好ましいものとは考えていなかった。むしろその逆である。戦後,単身者主義は男性ばかりではなく女性にも拡大浸透していったとして,それを憂うとともに,一方でマイホーム主義や私生活主義と呼ばれた家族主義を擁護した。おそらくそれらは,「雙個あい合しての個人主義」に近かったからであろう²⁾。

興味深いのは,彼の次のような主張である。「軍事社会や産業社会では,価値序列が逆立ちしている」「近代以降のわが国は,『富国強兵』といって,まさに軍国主義的な産業社会で,さきに指摘した単身者本位の生活様式においてこれら二つを重ね合わせたようなもので,そこでは,家事・育児・出産のような生活価値にかかわる仕事は不当におとしめられ,ほとんどその価値を認められなかった」が,戦後になっても「あいかわらず,生産第一主義で,家庭生活をおとしめる風潮はなくならなかった」(神島1982a;72-76)。これは,だいぶ後に上野千鶴子が『家父長制と資本制』(岩波書店,1990年)において主張した,現代社会を軍事=産業型社会として捉えるマルクス主義フェミニズムの認識とほとんど変わらない。

近年,ジェンダー研究者の中には,シングル肯定論が存在している。神島の単身者主義とそうしたシングル肯定論は,一見似ているように思える。しかし両者には正反対の認識があることに注意したい。

たとえば,上野千鶴子は,「妻を亡くすと,男はがたがたにくずれる」(上野2007:30)と述べ,「おひとりさま」であることのよさを強調している。また伊田広行は,『二人・夫婦・家族』が一体と思っていると,私のことをすべてわかってくれて当然というように自分中心に考え,人に依存的になったり,逆に抑圧的になってもそれが悪いと思わなかったりするような人間関係に陥る」から「シングル単位社会」を実現すべきだと主張している(伊田2003;165)。しかし,神島はむしろ,そういう家族成員への過剰依存や人格抑圧をしてしまう家族の在り方こそが,単身者主義の表れだ言うのである。

神島の立場からすれば,単身者主義こそ家庭を歪んだものにした元凶なのであり,単身者主義を否定して「複身者」としての自覚が大切だということになる。そして彼は,そのためには明治以来の「衣食住」の価値序列を転倒させて住を第一に優先させること,男性にも産休を認めるべきことや子供の権利を守ることなどを主張している。

②群化社会

この言葉は,神島の出世作『近代社会の精神構造』の中で使われ,よく知られた言葉であるが,その初出は次の文章である。「日本の都市は,私のいわゆる〈群化社会〉であってゲゼルシャフトではない。たとい農民が無限に都市へと流れこんで,都市が無限に膨張しても,それだけではF・テンニースのいうようなゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの歴史法則がその秩序形成において貫かれるはずはない」(神島1961;36)。このように,「群化社会」の概念は,もともとドイツの社会学者であるテンニースへの反論として提起された。

周知のようにテンニースは,選択意思にもとづく結合体であるゲゼルシャフトの例として大都市をあげ,本質意思にもとづく結合体であるゲマインシャフトと区別した。そして,ゲマインシャフトを「信頼に満ちた親密な水入らずの共同生活」とも言って,人はそこから「公共生活」であるゲゼルシャ

フトへ「見知らぬ国に行くような気持ちで入っていく」と述べた（テンニエス1957；35）。

これに対して神島は、日本の都市がむしろゲマインシャフトに近い「群れ」の集合体であると主張して、「都市をゲゼルシャフトと見立て、国総体のゲゼルシャフト化を夢想したのは、大いなる誤りであった」と批判する（神島1961；36）。そして、群化社会としての都市の特徴について5点にわたって論じたのである。

その第一は二重生活であり、「たがいに内面的関連をもたない生活様式が木に竹をついだように併存すること」である。内外、新旧が奇妙に両立し、「人格の分裂、主体的な人格の分裂、言語表現と事実との背理」が生まれ、そして何より「意識されぬ虚偽」が発達する。

第二は、享楽主義である。近代の都市は、「生存競争のきびしさや世相転変のめまぐるしさからくる焦燥感と異常興奮」があって、それが「酒と女への耽溺」「スポーツや勝負の世界への熱狂」を生み出す。これには当然、さきに指摘した单身者主義が背景としてある。

第三は、付和雷同。彼は、享楽主義について述べた後、「こうした感覚化・末梢化が進められるとき、反応はますます直接的、刹那的となり、感覚的情動によってひとはしばしば群集行動におちいりやすい」と言う。これには、「群を求めながらしかもその欲求がつねにみたされぬという矛盾」「大勢順応一流れに棹さす習性」「村生活における全員一致—そこでは『ご多間にもれぬ』ように行動することが身の安全という、いわば草食動物の群行動にも似た習性」の三つが働いている。

第四は、常識形成の問題である。自然村は「漠然と言わず語らずの世界」であったから、相互的な会話法が発達しなかった。そのため知識の拡大が判断力の育成に結びつかない事態が生じた。結局、常識とよべるものは「エロ・グロ・ナン」の水準に止まざるを得なかった。こうした常識の低劣化に抗うものとして「軍人精神と軍国主義」が立ち現れてきた。

第五は、英雄観の問題である。神島は群化社会にあらわれた英雄のタイプを五つの系列に分類している。第一は異常人崇拜。「異常性そのものが非合理的な信奉をかちえたカリスマ的英雄」であり、英雄不死の思想がこれである。第二は太閤崇拜。社会が天恵よりも学習が重視されるようになると立身出世を希うものに支持された。第三に剣の礼讃。剣客ものが青年団、軍隊または職場での地道な修養努力を通して一步一步責任ある地位に上ろうとする人びとの指針になった。第四は半官びいき。これは一種の敗北主義であり、自嘲や自虐の思想である。やがてそれは第二次大戦の「玉砕」の哲学につながっていく。そして第五に孤独な正義派。股旅物の「孤独の旅がらす」がその典型であるが、それは近代の庶民があたたかい内輪の世界を欲しながらじつは多くがそれから疎外されているという事実が反映していると言う。

二重生活、享楽主義、付和雷同、常識形成の問題、英雄観の問題の五つは、すべて群化社会に根ざすものとして考えられた。神島は、それらをすべて「生活の拠点」をもたない单身者の群れが生み出したものとみたのである。

③第二のムラと第二のイエ

「第二のムラ」も、『近代日本の精神構造』において鍵概念として使われた言葉である。近代化の過程で、田舎から都会に出てきた单身者たちは、自らのふるさとである「第一のムラ」を手本にして「秩

序感覚の培養基」を作った。神島は、それを「第二のムラ」とよんだ。具体的に言えば郷党閥と学校閥である。この「第二のムラ」と自然村である「第一のムラ」との違いについて、彼は次のように述べている。

さて、私はここで〈第二のムラ〉と〈第一のムラ〉との違いについて述べておかねばならぬ。第一には、その構成単位が家から個人に移っていること（出郷者のばあいは、学校と違い、自然村自体の家本位に規定される！）、第二には、もはや帰住は許されないが、つよい愛着をもっていること（学校卒業者のばあいは自明のことだが、出郷者のばあいも、じつは出身村に土地の余裕がなくて、帰住できぬことに注意！）、第三には、ムラ自体に生産面がなく消費的で、ムラビトはややもすれば労働蔑視と遊民化の傾向をつよく持つこと、第四には、ムラが出身地紐つき者の集団で、距離化されたふるさとを軸心とする団結だけがあって、そのふるさととは距離化されているかぎり現実性を持ち、じつは現実の世界ではなく回想の世界であること、などである（神島1961；30）。

まとめて述べれば「〈第二のムラ〉は、〈第一のムラ〉とは異なり、経済的基盤から遊離した秩序感覚とたえざる不安とにもとづき一種のロマンチズムのもとに統合された団結」である（神島1961；60-61）。

神島は、やがて後になって、秩序訓練という点では軍隊訓練もムラのそれに似ていることを指摘し、戦友関係も「第二のムラ」の一種だと付け加えるのだが、それと同時に「第二のイエ」という新たな概念も提起した。

都会に出てきた人たちは単身で出てくるのだから、故郷のムラとのつながりを絶たないし、だいいちに故郷のイエとのつながりを絶たないようにしている。そして彼らは、秩序モデルとしては、ムラなりイエなりをモデルにする。そのためにムラから出てきた人たちによってムラの外にムラ擬似的な集合ができ、またイエの外にイエ擬似的な集合ができるわけである。それを私は、「第二のムラ」と並べて「第二のイエ」と呼ぶことにしている。（「親分子分」は社会的オヤコに由来するもので、血縁親子の擬制とみるのは近代以降の考え方である。）日本の場合には、近代以降、単身者本位に都会ができ、都会の中にムラ的な結合ができ、イエ的な結合ができていった。そのことによって、本来のムラなり家族なりが逆にますます分解していった（神島1979；27）。

「単身者主義」のところで述べたように、都会において単身者を大家族のように包み込んだのが、官庁、会社、団体だった。国家が「家族国家」と言われたり、企業が「企業一家」と言われたり、徒党集団が「親分子分」と言われるのは、それらの組織が「第二のイエ」としての秩序原理を保持しているからにはほかならない。そして、そのような「第二のイエ」が生じてきた反面には、「第二のムラ」の成立のかげに「第一のムラ」の崩壊があったように、「第一のイエ」である家族の崩壊がある。換

言すれば、家族主義イデオロギーは、家族そのものの解体が進行するにつれて、立ち現れるのである。「第二のムラ」と「第二のイエ」は、そのいずれもが、近代社会に生まれた集団や組織が、前近代的な集団や組織の秩序原理を引き継いでいるということ、いわば新しい皮袋に古い酒が入れられている、という主張であったと考えられる。

④育成・馴化・帰嚮

まず、育成から説明しよう。神島は育成文化と制作文化を対比的に論じている。彼は、都市と村落の形態の違いについて述べている。ヨーロッパや中近東、インドや中国の都市は、城郭によって取り囲まれた計画都市である。これに対して日本の場合は、外界と屹立するものに自然と人工が入りまじまっていて、内外の差異が不明瞭であり、内部における自己完結性をもたないところに特徴がある。また村落の単位制は自然環境それ自身の境界に依存していて、神道がアニミズム的自然宗教から断絶することなく発展していったのはこれをよく表している。こうした自然との一体性をもつ社会は、制作文化ではなくて育成文化をその基調にしていると言う。

前田俊彦は、米はおのずからみのるのであって、人間が作るのではない。昔から「田を作る」と言って「米を作る」とは言わなかった、と述べている。まさにこれこそ育成文化である。西欧化＝近代化は、制作文化を基調とした資本制経済の導入を意味したが、日本では、人間世界と自然とが直接して境界をもたなかったゆえに、自然からの収奪が無制限化し、人間と自然との相互補完のルールが失われたと論じている（神島1975；109-116）。

馴化の対義語は異化である。この違いについて、神島は、面白い例を紹介している。欧米では、前の人に続いて発言する際には、「いや、私の意見は違う」「私は反対である」と言ってから自分の主張を述べる。ところが日本では「私は、さきにいわれた方の意見と同意見であるが、一言申したい」というような言い方をする。この場合、「同意見だが」というのは意見が同じだというのではなくて、「私は皆と一緒に行動する、仲間として行動することは間違いない」という意味の前置きなのである。神島は、このように馴化が優先している場合を馴成社会、異化が優先している場合を異成社会と名付け、日本は「馴成単一社会」だと述べた。彼によれば、異成社会は異化が積分されて階級社会になるのに対して、馴成社会の場合には異化が微分されて無階級社会になる。これは異質のものとの出会いにかかわっていて、馴成単一社会は、出会いそのものが小刻みに起きたり、少数の異民族が力の上では問題にならないような劣位でやってくる場合に形成されると言う（神島1975：104-106、1979；54-62）。

帰嚮とは、彼が死の直前まで完成に心血をささげた「政治元理表」の中のひとつの政治原理であり、そしておそらく彼が、日本社会を理解するためにもっとも重要視した概念である³⁾。この概念を説明した神島の言葉をそのまま引用しよう。

帰嚮原理は、人心の帰嚮を最後の切り札として成立するもので、その秩序の構造は、まつろう・しらす関係によって分類され、しらすはまつろうを起点としたよさし・あずかりで、推戴と垂拱の補完関係を前提しており、いずれも忘れることによって関係そのものが崩壊する。したがっ

て、はずれる・かくれる・たたるが忘却を介して記憶の更新をうながし、それによって人心の流れが変えられる。その意味で政治発展の論理は〈なる〉(あるいは世直し)である。そこで求められる価値は清明(無心)である。帰嚮原理が成立する基礎条件は、(1)脱出不可能性を秘めた孤島状況であり、それにもかかわらず、(2)隣接周辺に高度文明が存在し、移入浸透の可能性がある、かつ(3)内部に文化の均霑性があることである。そこでは、宗教的寛容がはやく成立し、自然宗教としてのアニミズムの連続的な発展がある。社会の基底に働いているのは、馴化強制(強迫観念) familiarization compulsive である(神島1977a; 226)。

かなり難解な文章である。まず、今日ではあまり使われない単語の意味を説明しよう。そもそもの帰嚮(ききょう)という言葉は、帰向とも言い、「心を寄せる。おもむきむかふ。なつきつく」ことを意味する(『大漢和辞典』修訂版)。「まつろう」とは「服従する、従いつく」こと。「しらす」とは「お治めになる、しらす」こと。「よさし」とは「統治などの委任。任命」(『広辞苑』第6版)。垂拱(すいきょう)とは「何事もせず傍観する」ことであり、均霑(きんてん)とは、「平均にうるおう。同じように利益を受ける」ことである(『新選漢和辞典』第7版)。

帰嚮原理そのものを説明した前半部分を筆者なりに意味を読み取るならば、次のようになろう。帰嚮原理とは、互いの人格への敬意の念にもとづく支配—服従関係であって、そこには明確な契約関係と言うよりも、課題や仕事を預けたり、任せたりすることが行われる。それゆえ、トラブルが生じた際にはその原因や責任を追及することよりも、当事者が外れたり問題を隠したり、あるいはそれがどうしようもない災いだったとして処理される。何より忘却、すなわち根に持たないことが大事である。言い換えれば、物事は「する」のではなく「なる」ことで移り変わる。そして、清く明らかなことが尊ばれる。

育成、馴化、帰嚮は、相互に深く結びついており、ひとつのまとまりをもった文化の各側面を言い表したのと言ってよい。そして、そうしたものの総体として日本的な「まとめ」の論理、すなわち日本の政治文化を捉えている。

⑤ 出世民主主義・世論民主主義・触感民主主義

民主主義の理念は、自由・平等・博愛だと言われる。そのことを踏まえて神島は、「友愛に力点を置くものは、触感主義的な民主化ということになり、平等に力点を置くものは世論主義的な民主化というふうに呼ぶことができる」と言っている(神島1979; 21)。

小社会・小集団の中では、お互いがお互い直接接触合って意思をまとめていく触感民主主義(スキンシップ・デモクラシー)が基礎になる。しかし、社会の規模が拡大すると、出世民主主義(ステータス・デモクラシー)と世論民主主義(オピニオン・デモクラシー)が生まれてくる。

世論民主主義は、「階級間の触感的親睦が拒否されている異成社会において、武力支配に対する抵抗を通して形成されてきた」のに対して、出世民主主義は、「身分間の個人的な雑居が許容される馴成社会において、非暴力的な政治の必要から形成されてきた」ものである(神島1982b; 85)。日本の場合には、触感民主主義は変容して出世民主主義(ステータス・デモクラシー)が生まれてきた。

そのとき、第二のムラである学校閥と郷党閥が出世民主主義の担い手になった。そして、その出世の頂点にあったのは天皇制官僚であった。

日本において、世論民主主義ではなくて出世民主主義が発達した理由にかかわって、神島は面白い話を紹介している。

ヨーロッパのレストランでは、客が楽しそうに笑っていてもウェイターは仏頂面をしている。それがマナーだからである。しかし、日本では家事使用人の女の子が、家族がけらけら笑っているときに済ました顔をしていたら、変な子だと思われる。「日本の場合には、使う者と使われる者、上の人も下の人も、心は当然通じあうものと考えている」（神島1979；23）からである。すなわち、欧米では身分的な階級対立が先鋭であったから、階級間で互いの意見を出し合って調整をはかる、という民主主義が発達した。これに対して日本の場合には、身分的な障壁が一応あったとはいえ、それは絶対的なものではなかったから、「人が下から上がっていくにつれて、下の情報も上に吸い上げられていく」（神島1979；25）という出世民主主義が発達したのだと言う。

彼は、これら二つの民主主義には、一長一短があると言う。出世民主主義は必然的に出世から脱落するものを生み出す。世論民主主義は、そういう犠牲を生み出さないが一人ひとりの人間の活力を最大限引き出すという点では欠陥がある。だから彼は「両建てでやっていくこと」が大切だが、その際に世論民主主義をたんなる多数意見に決めるということとして考えるのではなく、少数意見を生かす方法を考えること、その「構造化の理念と技術を開発する」ことが大切だと述べている（神島1972；158-161）。

⑥「機構」聖化・出世民主化・マジックミラー

これらは、〈支配〉の政治文化と、〈帰嚮〉の政治文化を並存させる方式として説明されている。彼は次のように述べている。

もし階級社会であるならば、階級内政治と階級間政治とはまったく原理を異にすることも、容易であるが、階級社会でない場合には、集団内と集団間とを区別する以外には異なる原理を純粹に同時存在させる余地が乏しく、異なる原理の並存する場合は集団間から集団内へ、さらに個人間から個人の内心にまで移されなければならないであろう。集団の内外に障壁がおかれるとしても、その場合は、個人がその障壁を通過することは許されなければならない。内外を差別する集団の障壁を個人が通過するとすれば、その場合、個人は〈みかわり〉（今日の言葉でいえば「変身」）を要求される（神島1977a；263）。

第一の「機構」聖化方式は、「機構」を聖なるものとみなして、「機構組織の中で、公のある職務について行動するときには、日常の私生活において行う行動様式とはまったく違った論理で動いてよいし、またそうすべきものだという考え方」をとることである（神島1979；181）。明治維新以来の「官尊民卑」は、まさに国家機構をカミとみなす発想であり、「公私の区別」の強調も、このあらわれとみなすことができる。

第二の出世民主化方式は、出世の階段をあげることに地位に応じた変身をして心を変えること、すなわち転向することである。かつては下に立つ者の立場で考え、発言していたものが、ポストがあがると物言いが違い、考え方も違ってくる。しかし、この「裏切り」が許容されてしまう。彼は、近代以降の日本社会において「状況論理」が支配的だと言われるのは、こうした地位に応じた変心＝転向が常態化していたからだと指摘している（神島1977a；264）。

第三のマジックミラー方式とは、建前と本音を使い分けたり、一方を不透明にしたりするやり方である。神島は、明治期の官僚制システムをその例としてあげている。明治期に市町村長は、名誉職であってその地域で人望のある人から選ばれたが、実際は中央政府の都合のために働かねばならなかった。つまり「上からは透明に見えるが、下からは見えない」しくみが作られた。その中で名誉職になった人は、「苦しんであるいは没落し、あるいは逆に、非常に悪い人間になって再生して中央に乗り出して」いったから、地方の指導者層は分解していったのだと説明されている（神島1979；184）。

すなわち、触感民主主義と帰嚮の政治文化に慣れ親しんでいた人にとって、近代社会の支配＝服従関係は耐え難いものであった。それは服従する側よりも支配の末端、最近の言葉で言えば「ストリート・ビューロクラシー」の位置にいる人びとにとって切実な問題だった。神島によれば、そこで編み出された方便こそ、この三つの方式だったのである。

⑦政治的磁場（単極的・両極的・多極的）

神島は、「政治状況のダイナミクスは、基底にある磁場に規定される」と言う（神島1982；64）。磁場には、単極的磁場・両極的磁場・多極的磁場の三つがある。

彼が単極的磁場の例としてあげているのは、ザイール（現、コンゴ）のピグミー社会である。そこでは人びとのあいだに「森の人間」であるという自覚があって、みんなが加わって話し合えば物事は解決するものだという信念が通用している。両極的磁場の例は、第二次世界大戦である。それぞれヨーロッパや中国大陸で個別に起きた地域紛争が、やがて日独伊の枢軸国と米英ソ中の反ファシスト連合の対立になっていった歴史をあげている。そして、多極的磁場は、戦後社会であって、軍事力の効用が物心両面において頭打ちになり、東西対立に南北対立が加わって国際政治状況が多極化した事態をあげている。

原理的には、次のような説明がなされている。

当該社会の性格、規模または基調原理のいかんによって磁場の形態が規定される。単極的磁場の成立条件は、(1)当該社会が馴成社会の性格をもつこと、(2)その規模が概して小さいこと、または、(3)基調原理がカルマまたは帰嚮であることである。両極的磁場の基礎条件は、(1)当該社会が異成社会の性格をもつこと、(2)その規模が比較的に大きいこと、または、(3)基調原理が闘争または支配であることである。多極的磁場の基礎条件は、(1)当該社会が多重複合社会であること、(2)その規模が大きく、情報社会化していること、または、(3)基調原理が自治または同化であることである。したがって、当該社会の性格、規模または基調原理が変わることによって、

磁場の形態が変化する。いずれの磁場も、条件が変わることによって、他のいずれの磁場にも変わりうる（神島1982b；71）。

文中、「カルマ」という言葉は多少わかりづらい言葉かと思う。カルマは、帰嚮、闘争、支配、自治、同化などと並んで、いずれも神島の「政治元理表」（ただし当時）にある秩序原理であるが、帰嚮とともに「お手やわらかな〈まとめ〉」とされ、帰嚮が育成労働に対応するのに対してカルマは採取労働に対応する、とみなされている（神島1982b；49）。したがって、より原始的な社会における、共有される自然信仰にもとづく秩序原理として理解してよいだろう。

さて、興味深いことに神島は、政治的磁場によって「政治批判の形式」が変わると言う。政治批判は、五つの形式に分類される。(1)物的・人的な損耗（そこには、飲食その他の乱費、逃亡・発狂・故意の衰弱、または死・自殺などが含まれる）。(2)仲間はずし（そこには、笑いやおしゃべり仲間からはずされることが含まれる）。(3)武力的抵抗（そこには、反乱、テロ、大衆示威などが含まれる）。(4)攻撃的言論（そこには、イデオロギーの注入、暴露、および批判、スキャンダル化、風刺などが含まれる）。(5)学問的批判（人文社会科学はもとより自然科学も含まれる）。そして、このうち、(1)と(2)は、単極的磁場と多極的磁場に対応し、(3)は両極的磁場、(4)は両極的磁場と多極的磁場、(5)は多極的磁場にもっとも対応しやすい、と述べられている（神島1982b；16-17）。

さらに、こうした磁場は入れ子構造をもっている。すなわち、「いかなる形態の磁場も、当該社会の下位集団として複数の異なる磁場を含み、それらの相関関係において成り立つ」（神島1982b；72）と述べていることにも注意しておきたい。

4. 基本視軸と現代的意義

7つの概念群は、相互に関連して日本の近代化のしくみを明らかにしている。それらを私なりに再編成してまとめれば次のようになるだろう。

日本社会は、もともと自然がつくる障壁を境界として成立する小さな集落単位で構成されていた。そこでは、支配-服従が先鋭的に対立することのない「やわらかな」まとめが尊ばれた。すなわち「育成、馴化、帰嚮」文化が基調にあった。近代化は都市への人口移動をうながしたが、都会に移り住んだ単身者は、こうした自然村での経験をもとに、学校閥、郷党閥という「第二のムラ」を作ったので、都市はゲゼルシャフトというよりも「群化社会」の様相を呈し、「単身者主義」的な文化が開花した。都会の各種団体が「第二のイエ」になったのも、そのひとつである。社会の規模が小さかった時代には、「触感民主主義」が成立したが、規模が大きくなるとそうはいかなくなる。日本社会は、もともと階級対立のない馴化社会であったから、西欧的な「世論民主主義」ではなくて「出世民主主義」が発達した。そして、官僚機構の中では、支配を有効化させるために、「機構」聖化・出世民主化・マジックミラー」という三つの方式が導入されたのである。

さて、以上のような神島の近代化理解をあらためて見直してみると、そこには二つの視軸が読み取れるだろう。

第一は、水平移動の視点である。神島は、自然村が山や川などの自然によって境界づけられた領域であって、それゆえに人工的に境界を区切ったうえで街づくりをするといった西欧的な制作文化とは違った「育成文化」が発達したと言う。また、近代化を、まず単身者の田舎から都会への移動から説き起こしているように、近代化をもともと曖昧だった集住の地理的境界が、産業化によって一気に無化した経験として捉えているように思われる。

第二は、垂直移動の視点である。彼は、日本社会の特徴を集団の境界が厳密な階級社会ではなく、曖昧な身分的区別だけがある社会であることに見出した。それゆえ日本の近代化は、世論民主主義を発達させるのではなくて出世民主主義を発達させたし、官僚機構の中では、「機構」聖化方式、出世民主化方式、マジックミラー方式という行政文化が生まれたと考えたのである。

つまり、日本社会は、水平的なパースペクティブにおいても垂直的なパースペクティブにおいても、境界がはなはだ曖昧で同質性の高い社会であったために、独特な政治文化を生み出したと考えられている。

ところで、さきにあげた7つの概念群のうち「政治的磁場」の概念だけは、日本の近代化から直接導かれたものではない。それは世界史的視野の中で抽出されており、おそらく「政治元理表」にもとづく政治理論を構想する中で新たに考えられたものだと思われる。

社会学者の視点からすると、神島の「単極的磁場、両極的磁場、多極的磁場」という概念は、ジンメルの「一人支配、多数支配、理念による支配」という「支配の諸形式」やウェーバーの「カリスマ的支配、伝統的支配、合法的支配」という「支配の諸類型」を想起させる。しかし、神島の政治的磁場概念がそれらと決定的に違うのは、安定した支配が前提されておらず、むしろ支配が安定的に成立する以前にある諸アクター間の対立の様式を示していることである。そして、そこにはどのような抵抗が可能であるか問い、それぞれの磁場における抵抗の様式を示していることである。これは社会学理論としては他に類をみない、きわめて重要な指摘だろう。

さて、神島が提起した7つの概念群は、今日の社会を考えるうえで有効な社会学概念ではなかろうか。たとえば、単身者主義。コンビニエンスストアやワンルームマンション、ケータイ（スマホ）やパソコンは、単身者にとって大変ありがたい施設や道具であり、一方で自治会（町内会）やPTAといった世帯や家族を単位とした活動がしばしば疎まれるのは、近代以降の単身者主義の浸透、深化という見方ができるかもしれない。

またその一方で今日、学校閥、郷党閥といった「第二のムラ」や職場のような「第二のイエ」の凝集性が弱化する一方で、ウェブ上で同好のもの同士が「いいね!」をしあうような「群れ」が生まれている、すなわち今や群化社会は、インターネットの世界に再生したとみることも可能だろう。

もっとも現実世界も一様ではない。入れ子構造として開放的な多極的磁場の世界の中に単極的磁場をもつ小集団が存在していて、それが、しばしば問題を起こすことは、こどもの世界の「いじめ」問題やおとな世界の「議会の機能不全」を想起すればよい。

その意味で世論民主主義はまだ発展途上であり、触感民主主義と出世民主主義は、あらゆる世界に残っている。また、今日でも「機構」聖化・出世民主化・マジックミラーという三方式は、行政文化として根強く残っている。

こうしたなかにあって、「育成・馴化・帰嚮」の文化は両義性をもちつつ、未だ日本社会を規定し続けている。すなわち、たとえば、それは先の原発事故に際して責任がうやむやになった遠因と考えられるし、「再帰性の欠如」とか「構造的な無責任」としてしばしば批判されているが、他方で、暴力による衝突を回避し、環境との調和を重んじる思想を下支えするものだとも言えるだろう（大庭健 2015；12）。

以上、応用例を思いついたままに書いた。7つの概念群をそれ以外の現象にも適応可能だろう。これらは、社会学的分析にとって、たいへん魅力的な道具である。私は、こうした神島の遺産を日本における社会学の概念道具箱の中に入れておくべきだと考える。

註

- 1) 本研究のなかで、本書のなかで、学部生の頃教えを受けた今井清一、越智昇二人の先生の文章があることをはじめて知った。とくに指導教授だった越智昇先生の「先生が声をかけてくださらなかったら、今日の私は無かった。そういう意味で先生は私にとって、かけがえのない恩師である」という文章を読んだことは、まったく同じ思いを越智昇先生にもつ筆者にとって、学問的なハヴィツスの確認であった。
- 2) このように単数ではなく二つを基本におく考えは彼にとって基本的なものだった。後にそれは「〈あいたい〉理論（ツワイザームカイト・セオリー）」と呼ばれるようになる。（神島1975；73-83）
- 3) 神島は死の直前まで「政治元理表」を彫琢していた。したがって最終的なものは、彼の死後明らかになった（神島二郎先生追悼書刊行会 岡敬三/大森美紀彦編1999；43-44）。

参考文献（ ）は初出年

- 家永三郎 1961「神島二郎著『近代日本の精神構造』「思想」、第446号、pp.92-95.
- 伊田広行 2003『シングル化する日本』洋泉社新書
- 上野千鶴子2007『おひとりさまの老後』法研
- 2009『男おひとりさま道』法研
- 大嶽秀夫 2013（1994）『新装版 戦後政治と政治学』東京大学出版会
- 大庭健 2015『民を殺す国・日本 足尾鉾毒事件からフクシマへ』筑摩書房
- 大森美紀彦2009「神島二郎研究ノート」「国際経営論集」37号、pp.137-149.
- 神島二郎 1961『近代日本の精神構造』岩波書店
- 1977（1961）『日本人の結婚観』講談社学術文庫
- 1984（1962）『常民の政治学』講談社学術文庫
- 2013（1971）『新装版 文明の考現学〈原日本〉を求めて』東京大学出版会
- 1972『国家目標の発見』中央叢書
- 1975『日本人の発想』講談社現代新書
- 1977a『政治の世界—政治学者の模索』朝日選書
- 1977b『人心の政治学』評論社
- 1979『政治をみる眼』NHKブックス
- 1991『新版 政治をみる眼』NHKブックス

- 1982a『日常性の政治学 身近に自立の拠点を求めて』筑摩書房
- 1982b『磁場の政治学—政治を動かすもの』岩波書店
- 1990『転換期日本の底流』中央叢書
- 神島二郎/鶴見和子1979「対談・同時代から 個と集団をめぐる」『グラフィケーション』第156号, pp.3-9.
- 神島二郎/前田愛1981「対談 日本近代と単身者主義」『伝統と現代』第72号, pp.29-45.
- 神島二郎先生追悼書刊行会 岡敬三/大森美紀彦編 1999『回想 神島二郎』(非売品)
- 北野雄士 2010「近代化の内生的要因 神島二郎『近代日本の精神構造』」井上俊・伊藤公雄編『日本の社会と文化(社会学ベーシックス第10巻)』世界思想社
- 相馬庸郎 1961「神島二郎著『近代日本の精神構造』」『日本文学』第10巻9号, pp.731-734.
- 田口富久治2001『戦後日本政治学史』東京大学出版会
- Tönnies, F (1887=1957) *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, Fues. (杉之原寿一 訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粹社会学の基本概念 上』岩波文庫)
- 戸邊秀明 2014「神島二郎の1950年代と思想史研究の模索—「民衆思想史」に至る史学史的文脈の再定位」赤澤史郎・北河賢三・黒川みどり編『戦後知識人と民衆観』影書房
- 永井道雄 1966「三代政治家の意識構造—神島二郎編『権力の思想』」『展望』86号, pp.49-51
- 永谷健 1999「神島二郎『近代日本の精神構造』(1961年)」筒井清忠編『日本の歴史社会学』岩波書店
- 比較日本研究会 1999「座談会 神島二郎の世界」『政治文化』14号, pp.1-16.
- 前田俊彦 1969『瓢鰻亭通信』土筆社
- 1973『根拠地の思想から里の思想へ』太平出版社
- 1975『続 瓢鰻亭通信』土筆社
- 2003『百姓は米をつくらず田をつくる』海鳥社
- 松沢弘陽 1962「神島二郎『近代日本の精神構造』(1961年)」『國家學會雑誌』, 第75巻11.12号, pp.606-629.
- 丸山礼二 2014「解説 丸山眞男と戦後政治学」丸山眞男『政治の世界 他十篇』岩波文庫
- 安丸良夫 1961「神島二郎『近代日本の精神構造』」『日本史研究』56号, pp.75-82.
- 山端伸英 1998「神島二郎仕掛けのオレンジ」『情況』第二期, 第9巻5号, pp.162-164.